

第96話 (74頁) スピードの力

あるとき、汽車がものすごいスピードで線路を走っていました。ちょうど、その線路のふみきりで、重い荷車をひいた馬が立ち往生していました。お百姓が、馬に線路をわたらせようと、やっきになっているのですが、馬は荷車を動かすことができません。後輪のひとつが、はずれていたのです。車掌が運転手に大声で「ブレーキ!」とさげびました。が、運転手はいうことをききませんでした。

運転手はお百姓が馬と荷車を先に行かせることも、引き返させることもできないうえに、汽車はすぐには止められないことを考え合わせたのです。運転手は止めようとはせず、全速力で汽車を走らせて、荷車に思いきりぶつかりました。お百姓は荷車からとびのき、汽車は木っばをとばすように、線路から荷車と馬をはねとばしました。しかし、汽車のほうは、ひとゆれしただけで、先へかけぬけていきました。

運転手が車掌に言いました。

「今回は、馬を1頭と荷車をだめにするだけですんだけど、もし、わたしがきみのいうことをきいていたら、わたしたちも死んでしまっただろうし、乗客も全員死なせてしまっただろうよ。スピードがあったから、荷車をはねとばしても汽車はショックを感じなかったけれど、ゆっくりだったら、脱線していただろうからね……。」

「線路の先に馬と荷車が見えた。汽車は猛スピードで向かっていく。どうするか——。車掌と運転手で判断が違って、という話で、危機一髪の緊迫感が伝わってくる。」

「急ブレーキをかけても、もう近すぎて停まれない。『だったら…』と、さらにスピードを上げ、線路の上の馬と荷車を跳ね飛ばした。それが、運転手の決断だった。」

「結果、汽車はひと揺れしただけで済んだ。運転手のおかげというわけだ。」

「経験知というものが、どんなに大事か。この話は、それを伝えたかったんじゃないか。運転手は経験知を体現し、急ブレーキを主張した車掌は経験が足りなかった。」

「なるほど。最後のところで、運転手が少し得意そうに車掌に論している。」

「ハーバード大学のマイケル・サンデル教授の『白熱教室』を思い出した。究極の選択がテーマになっていたからね。」

「映画『タイタニック』もそうだ。どんな策を弄しても救命ボートに乗り込むか、傾いた船と一緒に深く沈んでいくか…。こういう極限の場面では、その人の全部が試される。」

「アーズブカに戻ると、本当に運転手の言う通りだったのかな、って思うところがあるんだ。急ブレーキをかけて速度を落としたら、荷車とぶつかって脱線した、というのが、運転手の推測だけど…」

「ふーん。そう言われてみると、ここは説得力がいまいちかもしれない。そのぐらいの衝撃で、乗客も全員死んでしまうなんて、大げさすぎないかな。」

「でも、この話は運転手の説明がもっともだ、という前提で成り立っている。少なくとも、そこを筆者は疑っていないよ。」

「とてもリアルな感じがするし、ひょっとして実際にあった出来事がもとになっているんじゃないか。」

「黒煙を上げて走る蒸気機関車の力強さ、スピード感。とても印象的だし、実はそこに隠されたモチーフがあったように思えてきた。」

「蒸気機関車って、やっぱり産業革命や近代化の象徴だからね。」